

淨土

1990-6

昭和十年五月二十日（第三種郵便物認可） 每月一回（一日発行）
昭和二十四年四月二十八日（兼轄省 特別振承認雑誌）第三二五号
平成二年五月二十五日印刷 平成二年六月一日発行
第五十六卷

六月号





六月の秀句

大梅雨の茫茫と沼らしきもの

高野 素十

梅雨寒の猫に怒りをよみとらる

三沢 みよし

子の目にも梅雨終りたる青嶺立つ

谷野 予志

六月号



利益現在にして、しかも若干の仏達の証誠し給える弥陀の名号を称念すべき也。

——『念仏大意』

目次

——連載法話(Ⅱ)——

「腹切り典常」談……………八木季生……(2)

<いのちを考える③>

死を待つ部屋……………佐藤雅彦……(13)
——植物人間を看取る——

読者のページ

極楽浄土を考える……………上野浩……(21)

季語やぶにらみ(2)……………木下隆一……(29)
春女苑・紫陽花

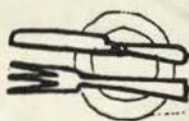
◇◇長篇連載◇◇

伝弘の生涯(18・最終回)……………松浦行真……(37)
——大僧正岩井智海伝——

表紙絵 小林治郎画

(法) (話) (Ⅱ)

「腹切り典常」談



八や木ぎ季き生しょう

(大正大学講師)

武士が切腹したという話であれば、日本の歴史には枚挙にいとま無い極めてありふれた話である。しかし、お坊さんが切腹したとなると、これは穏やかでない。

どうしてそんな事が……と思われるであろうが、しかしお坊さんの切腹事件が、極く近代の江戸時代末期、文政十二年（一八二九）の暮れも押し迫った十二月二十七日、浄土宗内の、それも芝の増上寺の山内で起こったのである。

最初に、この事件のあら筋を申し上げておこう。

増上寺第五十九世・宝譽頭了大僧正が、山内の坊中十七院の寺家方に対して、香衣の被着許可を与えた。これに異義を唱えた坊中以外の大衆との間に席次の紛争が生じて山務が停滞してしまった。そこでこの調停に入った増上寺役者・岱譽典常が、その当時は新田大光院第五十二世であったが、責任をとって割腹自殺をしたのである。これを世に香衣騒動と言っている。

さて、この事件に関する記録は、百六十年の歳月を経過していることと、余り公にしない不祥事であるだけに今となつては極めて記録が乏しく、公式にはわずかに浄土宗大年表、七一五頁文政十二年の項目に「十二月二十七日、新田大光院典常（岱譽）、増上寺香衣騒動に付き屠腹自殺す」と、たった一行の記事が記されているだけである。

増上寺の香衣騒動に何故岱譽典常なる人物が関係してきたか、岱譽典常という人はどういう人であるのかを理解する為に、十五年程時代を戻して増上寺第五十六世・典海大僧正に目を向けて見ることにする。

増上寺の教譽典海大僧正は、和歌山県の出身で、東京三田林泉寺の稟譽説典の弟子になり、文化十年十月に増上寺の五十六世になった。

増上寺に晋董した翌年の文化十一年（一八一四）に、徳本行者に江戸下向を要請して、これを実現させたが、当時留錫していた摂津勝尾寺を出発した時の模様を、行誡上人は「徳

本行者伝」の中にこう書いている。

「大僧正より師の下向をうながし玉へる事度々に及びぬれば、同年の五月中旬勝尾の草庵を辞せらるるよし諸方にきこえければ、遠近の道俗、いまは最後の御わかれなるべしとて詣できたるもの日々引きもきらず、白雲は紅塵に変わり山澗も朝市の如くにぞ見えにける……」

豊蓮社岱譽上人正真道阿典常大和尚之塔（正面）

新田大光院五十二世

蓮友

相譽頼阿

習譽薫阿

実譽迎阿

昵譽香阿

住譽是阿

貫譽得阿（右横）

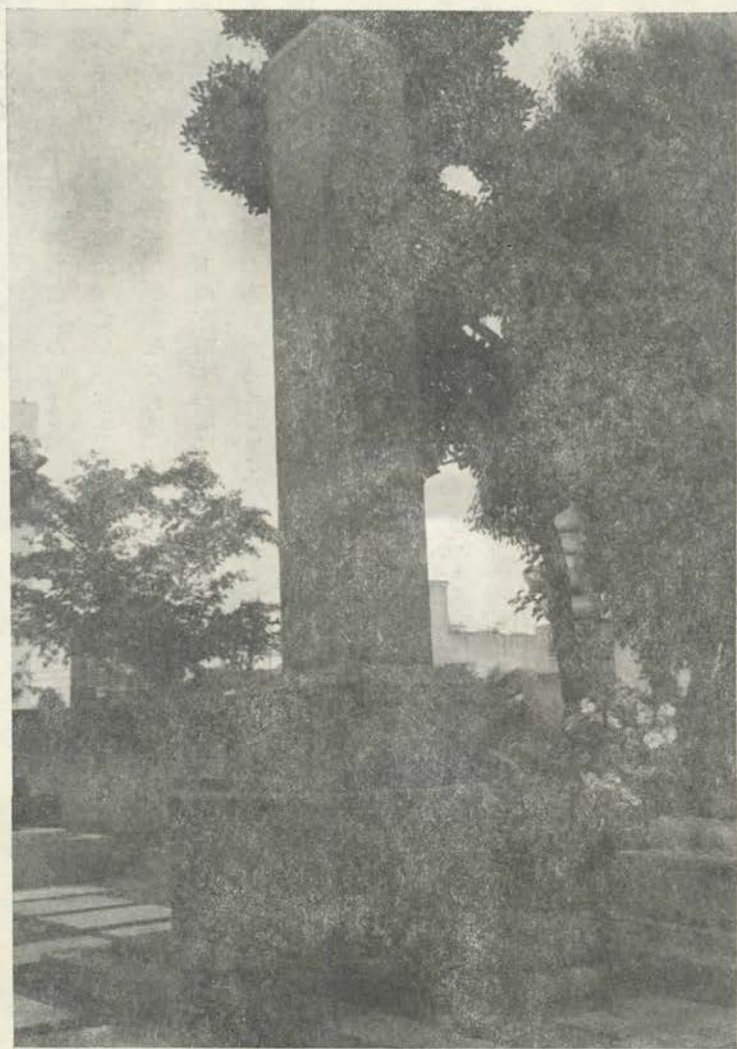
文政十二年巳丑十二月二十七日

瑞譽心阿

観譽想阿

還譽真阿

充譽定阿



＝ 文京区一行院墓地内にある俗誉典常の墓 ＝
＝ 竿石長さ 243 cm : 基段高さ 98 cm ＝

とある。

人生五十と言われたこの時代に、六尺豊かな体軀と、六年間の苦行に耐えた強靱な体力の持主の徳本行者であっても、五十歳半ばを過ぎての江戸下向は、今生の別れと名残を惜しんだ人々の気持の程が察せられる。

この時の徳本行者の江戸下向は、単に増上寺典海大僧正の要請だけではなくて、その陰にもっと大きな別の力のあったことが考えられるが、その陰の力に増上寺役者・典常の働きがあったと思われる。

この年、五月十九日京都を出発した徳本行者は、途中海路をも併用して六月十二日に江戸に到着して小石川伝通院に留錫した。

そして「同年六月二十日、師はじめて三縁山に登りて大僧正教養大和尚に謁せらる。僧正歓喜斜めならず、清談時を移し、願わくは永くこの地に錫を留めて群生を利益し玉へかし」と述べられたと行誡本に書かれている。

関西から関東に化益の領域を移した行者は、席の暖まる暇無く東奔西走の巡錫の日々を送るが、特に將軍家内外への日課誓約の活躍は目を見張るものがある。譜代、外様の大名小名、老中、若年寄などまで、行者を請待する者百八十家というから、諸候の過半数に達した程である。

文化十三年の春、一ツ橋徳川家では、徳本行者の為に一寺建立の内願を幕府に出したが、新寺建立は禁制になっていたので受入れられなかった。そこで八月十二日になって、小石川原町（現在文京区千石）の一行院を改修するという事で許可を得た。

行誠本行者伝に、

「小石川一行院は、師を抑留のために設けられし道場なれば、貴賤道俗おしなべて、心を用い莊嚴し永く師を安置し申さんとて、其年の十一月七日より土を掘り石を運びはじめ、百工職を上げみ、万人力を尽くしければ、十二月二十三日には仏殿厨坊をはじめ、門塀泉石に至るまで残る所なく落成せり。金碧目を輝かし鐘声耳を新たにす」と書かれている。

この一行院の建立にも、増上寺役者・典常が内外表裏共に大いに活躍している。そして、翌々年の文政元年十月六日に徳本行者は六十一歳で入滅しているが、その前後の記録のあちらこちらに典常の名前が出てくる。

徳本行者の導師を勤めた典海大僧正は、翌月十一月に西化して、五十七世膳誉実海、五十八世空誉舜従と続き、五年間に三人の大僧正の交代があつて、文政六年三月十五日に宝誉顯了大僧正が増上寺第五十九世の法灯を継いだ。

宝誉顯了は、増上寺天神谷止著室・顯理の弟子で、文化二年十月二十六日、江戸崎大念

寺の三十一世となり、文化十三年二月十九日、瓜連常福寺の五十八世、文政三年十一月二十二日、小石川伝通院の五十一世になった。

その伝通院在山三年間に、徳川十一代將軍家齊公の第四十二子陽七郎、第二十二子幸子（会津、松平容衆室）、第五十一子富八郎の導師をしている。宝譽顯了が、將軍家の子供三人まで続けて導師をするということは、単なる偶然とはいえない。

更に増上寺に晋董してからの活躍を、「増上寺史」の中に見てみよう。就任して一月後の四月二十九日、有章院殿（七代家継）忌日、家齊公参詣、導師顯了大僧正。六月十四日、家齊公にものを献じて暑中を見舞う。翌年の一月二十四日の台徳院殿（二代秀忠）祥月、家齊公参詣、大導師顯了大僧正。等々、顯了大僧正就任と共に代参ではなくて、將軍様直々の参詣がふえている。これは何故だろうか。

十一代將軍家齊は、愛妾・側室が多くて、その数は四十人とも五十人ともいわれているが、子供も多くて五十三人いる。

また家齊は、一ツ橋民部卿治済はるなだの長男で、十代將軍家治に子供が無かったので養子となり、十一代を継いだのであるが、この家齊が一ツ橋徳川家の出身であることが、典常と重要な関係をもってくるのである。

典常が増上寺役者になってから、徳川家、特に一ツ橋民部卿治済との関係が密接にな

り、徳本行者を江戸に招いて江戸城に念仏の声を響かせ、更には將軍様を足しげく増上寺に通わせる、これは典常でなくてはできない芸当である。なぜなら典常は民部卿治済の落胤であつたからだ。

そうすると十一代將軍家斉公とは兄弟、後の十二代將軍家慶公の叔父になるのだから、大変な身柄のお方と言わざるを得ない。

しかし表向きは伊勢国桑名郡長島的光岳寺（現在は長島町西外面二〇六一）祐道の弟子、同村の大庄屋榎尾庄右衛門の伴ということになっていた。

典常は増上寺の学寮、南中谷・蔡華楼の寮常の弟子になり、増上寺役者から文政三年に寮常の跡を受けて八王子大善寺三十五世となった。大善寺のお十夜が江戸で評判になったのは、典常が住してからともいわれている。更に文政七年に新田大光院五十二世となつて、香衣檀林から紫衣檀林へと出世した。

この年の十一月になって、増上寺がかねて上願していた衆徒教養基金三千両が下付されることになった。この利子で山内学衆を末永く養うことができるようになったのだから大変なことなのである。

檀林修学道場としての増上寺には、当時三千人に及ぶ所化衆がいた。これらの人々は所化方と呼ばれ、「新米」から「学頭」に至るまで修学課程を九部に分け、さらに席次を三

席と別に定めて教化統制をしていた。また山内の三つの谷、細分して九谷に分けた学寮に起居していた。

一方山内の塔頭・別当など寺持ちの僧は寺家方と呼ばれ、所化方と区別していたが、増上寺には山内に、塔頭として三十坊・御霊屋別当八院・同三蓮社、及び別当八院などがあった。

所化方の大衆に資金を与えたかわりに、寺家方には香衣の恩典を与えてという思いやりから香衣被着許可を申請して綸旨を得た。綸旨は朝廷に出願して勅旨を受けることであるから、現在の香衣被着許可とは大分重さが異なるのである。

坊中十七院に香衣の被着許可を得た寺家方と、黒衣の被着しか認められない所化方との間に、当然のことながら席次の争いが生じてきた。

この問題の解決を誰がするか。それは所化方に学資金の下付と、寺家方に香衣被着と、どちらも難しいことをやってのけた陰の実力者、典常が解決をつけざるを得なくなった。

文政十二年（一八二九）二月九日、知恩院から円光大師のお像を江戸寺院に下付するに当たり、増上寺で供奉法要があったときに、坊中、大衆の間に、激しい席次争いが生じた。

典常は責任上その仲裁に入ったが、紛争はなかなか収まらず、抗議の張本人である所化方の学頭舜了以下六名が退山処分になった。しかし大衆は争いを止めなかったので、遂に

この年は増上寺の伝法会は中止された。

典常は何とかして調停を計ろうと必死の努力をしたが、十二月の二十日を過ぎても問題は解決しなかった。

年頭には増上寺恒例の三段式という行事がある。これは一般の修正会のこと、法要を三回に分けて伽陀を誦するところから修正会三段式というのであるが、一山の総出仕で厳重に勤修する法要だけに、紛争を続けていては三段式が行なえない。三段式が済まないことには、大僧正が年礼を受けられない。年賀欠礼になりかねない。

二十五日を過ぎて典常は、所化方、寺家方双方によかれと思ってやったことであるが、かかる結果を招いたことは自分の不徳の致すところ、一死以て元祖大師に謝し奉るほかにいと覚悟した。

文政十二年十二月二十七日、月なき空に星のみ寒き木枯しの吹く藝華楼の浄室に、端然と座を占めた典常は、燈火あかあかと点し、おもむろに撫でた下腹に「利剣即是弥陀号」と唱えて、見事に一文字掻き切つて最後を遂げたのである。

俗誉典常の墓は蓮友の計らいで、生前に深く帰依した徳本行者の廟所の隣に建てられた。今もその墓は一行院に現存している。

◎『維持会員』へのご加入のお願い

法然上人鑽仰会は月刊誌『浄土』を刊行しながら、法然上人の教えを宣揚し、念仏信仰の実践をしてまいりました。現在、『浄土』誌は五十六巻を刊行し、鑽仰会創立以来の熱意を盛り返したく努力しています。しかし弊会の活動は、『浄土』誌の刊行が唯一の務めというように、まことに細々とした微力な努力に終始している状態です。しかも雑誌の発行自体も不手際や遺漏の多い作業で、愛読して頂いております会員諸兄には、まことに申し訳ないかぎりであります。しかしともかくも『浄土』の灯を消すことなく、遅々とした歩みではございますが、今後とも一步一步前進してまいりたく、担当のもの、一層の精進を続けたいと思っております。

つきましては、「年会費 金二万円」のご助成をもって、弊会の維持会員として月刊『浄土』刊行に暖かいご支援を賜わりたく、重ねて心よりお願い申し上げます。

法然上人鑽仰会

死を待つ部屋

— 植物人間を看取る —

佐藤 雅彦
さとう まさひこ



医療の場において、患者が生き死にに関わる選択を余儀なくされた場合、患者の家族の決断には二通りの傾向がある、という話は、すでに大きく取り上げる必

要もないくらい知れわたっていることだ。一つは、決断する家族が患者と、日頃コミュニケーションをとりにくい関係であった場合、おおかたの家族は、「お願い

ですから、できる限りのことをしてあげて下さい」と云って懇願するという。患者は一人暮らしで、家族は遠隔地に住居していたり、一緒に暮らしていても、患者が死を迎えることによる患者、家族双方の心の準備のできていない場合等は、少しでも長く、生き永らえさせたいという気持ちかはたらくようだ。

これに対してもう一つは、「あんなに苦るしんできたのですから、楽にさせてあげて下さい」もしくは「元氣な頃から『人工的な延命などせず、自然に死ねたら』と申しておりましたので、延命的な治療はやらないで下さい」と医療スタッフに打ち明ける、家族と患者のコミュニケーションがよくとれているケースであ

る。「あんなに苦しんだから」という言葉の裏には、患者の苦しみを共に過ごしてきた家族の思いやりが込められているであらうし、「生前、元氣な頃から『延命せず、自然に死ねたら』という患者の意志を家族が伝えられるということ、は、「死」に対する家族内のコミュニケーションが密にとれていたあらわれといえるだろう。これらのことは、コミュニケーションの濃薄によって、人は、家族や自分の縁ある人との関わり合いの満足度を、医療場の選択へも投影しているように思えてならない。

例え話によくあることだが、A子さんという老女には、二人の息子がいる。長男の一郎夫妻は、A子さんから、かなり

遠隔地に住んでいる。次男の二郎夫妻は、年老いたA子さんを看病するため、同居している。長年、病床に苦しみ「早く迎えいただきたい」というA子さんが、いよいよ意識不明の重態となった。二郎夫妻も看病に疲れ果て、母A子さんを入院させ、延命などせず、楽にしてあげて下さいと、積極的な投薬による治療を拒ばみ、A子さんを看取る。危篤と聞いてやってきた一郎夫妻は、何故、できるだけのことをしてやろうとしないのだと、弟夫妻をなじり、諍かいとなる。これが基で、A子さんの死後、財産分与に端を及ぼし、長男夫妻、次男夫妻は、日ましに兄弟の仲を疎遠のものとしてしまう。この例話のなかで、母を思い慕う気

持ちは、長男、次男ともに深いものが同じくあるにちがいない。しかし、母とのコミュニケーションのとり方の差異が、全く異なる判断を生み出してしまふ。コミュニケーションのとり方も、当事者だけでは、どうにも望むようにはならない社会の環境が、私たちを包みこんでいるとは、いえないだろうか。

さて、前段に随分、手間どってしまつたが、「管だらけ」の集中治療室で、「もう意識は戻ることはないでしょう」と宣告された「おばさん」のいのちに対し、夫である住職は「できるだけのことをして下さい」と選択をした。子供のいない住職夫妻には、間近に金婚式を迎える二

人の生活にとって、互いの存在こそ互いの人生そのもの、というような堅い絆があったであらうし、何事も中途半端はイヤ、全力投球第一主義的な住職の性格、人生観が「できるだけのことを……」という選択をさせたのだろう。しかし、

「おばさん」自身は、苦しまずに往きたい、人に迷惑かけることなくすつと早く往きたいという言葉を、他者の訃報を聞いたりする度に語っていた。無論、今となっては、自分の夫の下した決断をおばさんが喜んでくれたのかどうか、憶測でしかものは言えない。

脳死に近い状態と告げられて、幸い、安定した植物状態に至るまで、一ヶ月弱の時間がかかった。それまで、我々家族

は「待機」するための毎日を過ごした。振り返えれば、この期間が、家族にとっては、一番苦しく辛い毎日だったと思う。良くなるあてのない容態の変化を知らず電話を、ただ「待つ」というときの積み重ねだったからだ。

集中治療室で、管だらけの体を横たえているおばさんの容態に変化が生じるまで、私たちは階下の待合室で待つより医療スタッフに申し渡された。新しく増築されたばかりの病棟の玄関を入ると、一階のフロアは、まるでホテルのロビーのように、革を装うソファが並びゆったりとしたスペースがある。毎日の通院時、それらのソファに、不似合いに横たわったり、煙草をふかしたりしているグルー

ブが、いつも二、三かたまりいた。それは、集中治療室用の待合室の居心地の悪さに、束の間の憩の場を求めて流れてきた人達であるかとわかった。そんな人々のいるロビーを右手に通らず、三基あるエレベーターで地下へ降りると、そこは、いつも電気の暗い廊下、そして、コンクリートの地肌のままの駐車場、おかた人が安らぎなど、見出す余地もない空間を通りすぎた奥手に、ただ漠然と長椅子が、二十ほどある待合室がある。入り口の前には、テトラバックの牛乳類の販売機が一台と、室内が禁煙のため、立ちながら一服つくための灰皿がある。完全に、集中治療室の待合いのみの空間で、他の医療者も、患者も、用のない以

上、全て近づくこともない、隔離地帯のような周囲である。

部屋の中には、二十五日間通して一番少いときは、我々の他に二所帯の人々、多いときには、六、七所帯、二十人ほどの人がいただろうか。窓際が一番奥には、電気湯沸しポット、寝袋、毛布、等、持ち込んで、すでに、一ヶ月以上、待ち続けているという家族もあった。このような家族は、千葉や、埼玉等、遠方の人たちが多く、たまたま、折悪く患者が倒れたのが、この医大の近くで救急車で運びこまれた、という人々である。それを聞くと、歩いて五分足らずの距離に寺のある我々は、恵まれていると考えなくては、ならない。

そこで「待つ」ものは、スピーカーによる呼び出しでも、白衣を着た医療スタッフが呼びに来ることでもない。入り口のドアの壁近くに設置されている電話の呼び出しだった。「トルー、トルー」と電話が鳴るとき、待合室にいる全員の眼が、一つの受話器に集中する。それは、集中治療室にいる患者の容態に変化があった時だからだ。それも急を要するとき、即ち、家族に、大至急、階上へ上がってきなさいと命じる合図なのだ。快方に向かったときは、日に一度、担当医と面会した折、口頭で伝えられているようだった。

電話が一度も鳴らない日もある。また一日に二度、三度と鳴るときもある。そ

の度、一番近くにいる人が、受話器を握る。そして「田中さん、おられますか?」と取りつぐ。田中さんは、電話を受けとり、ひとしきり、頷いた後で、悲愴な顔で、待合室を出ていく。一本の電話が鳴るたび、待合室の住人は、入れ替わっていく。

私たちは、長期戦となることが予想された頃から、一日を四回ほどに分けて交替で、待機することにした。朝七時半位から昼食時まで、それから夕方まで、夕方五時位から夜中の十一時位まで、そして朝まで、というように次の人が待合室へ到着すると、「山田さん、亡くなったみたい」とか「あの壁際の人達、先刻来たばかりの川口さんですよ」といった、

その時間中の、出入りの報告と、「うちのおばさん、何もないね」と確認をして、引き継ぎとでもいう会話を交わして交替した。もとより、住職夫妻と、従姉と私という四人の寺族であり、住職は、そのローテーションには加わらないので、お手伝いさんや遠方の親戚にも昼間、助けてもらうことにした。

私の当番は、もっぱら、夜十時半すぎで温かい缶コーヒーを買い、朝七時半頃、代りが来るまでの時間帯だった。病院へ向かう坂道を下るときは、今夜、電話があるかもしれない、という覚悟と、朝、逆に坂を登る道では、こうして帰る道すがら、電話がかかってもう、この通い路は、これが最後かなと思った

り、「おばさんの死ぬことを待つ」ときを、多勢ですごしているお互いに、妙な連帯感を感じはじめていたのだった。

おそらく、この何日間のうちの電話で、必ず階上の集中治療室へ呼び出され、臨終を迎えるのだらうと腹を決めていた「おばさんのいのち」は、管だらけの状態を脱する気配をみせてきたと、いつの間にか医師に告げられていた。つまり脳死に近い状態ではなくなったのだ。安定した自発呼吸を開始し、人工呼吸器、生命維持装置を取り外しても、自力で生存可能な状態なのだという。おばさんの脳は、自分の心臓に対して指令をおくり、しっかりとした呼吸をするよう、はたらかかけているという。心臓に命令をおく

『江戸物語』

細田 隆 善（豊明）著

——本誌連載の好評の内容が、江戸情緒あふれる美装本に——

● 四六判／浮世絵ほか写真・図版一五〇点収録

● 定価一八〇〇円【付Ⅱ名所史跡・資料館案内】

△発行・発売▽ ノンブル社

東京都新宿区新小川町六―三九―七〇一
電話（〇三）二六九―二九三 二六七―六六三七
振替（東京）七―一一〇九三／〒二六二

っても、脳は元へは戻らない。意識は回復することはないだろうと医師は言う。死を逃れられたような喜びと、反面、これからどうなるのだろうか、という不安が、もち上ってきた。

おぼさんは、集中治療室から、一般の個室の病室へ移ることになった。それから、まさに植物人間になった「おぼさん」と会話を続ける毎日のはじまりだった。（つづく）

極楽浄土を考える



上野^{うえの}

浩^{ひろし}

私共は仏教によって少くとも二つの大きな問題について教えられていると思う。その一つは、一人人間はこの世に生きた以上はそもそも何をなすべきかということである。この

問いについてはいかなる人に対しても、大聖釈尊自身が、その正しい生き方をいろいろな方法によって懇切丁寧に教えてくれている。すなわち、人として踏むべき道、倫理の道を

教えてくれているのである。そしてもう一つ

の問題は、人間はいかに死ぬべきかという死後のあり方、死後の運命のあり方についてである。これについてはなにびとが教えを与えてくれるのであろうか。釈尊自身は人間の死後のことについては余り多くを語らなかった。しかし、仏教においては多くの、すぐれた仏陀が出現して、人間の死後の正しい行き方を教えてくれている。その中でもわが国においては、これら数多い仏陀の中でも一段と人々の敬愛を受けている仏陀がいる。これは阿弥陀如来と呼ばれる仏陀である。

それではこの阿弥陀如来とはいかなる経歴をもった仏陀であって、いかなる事蹟を積み、そして私共に対していかなることを教えようとしているのであろうか。このことについて

少し考えてみようと思う。

仏教の經典によると、遠い、遠い昔のことであるが、錠光如来じやうこうという仏陀がこの世に現われて、多くの人々を教化し、それぞれに人間の道を取得させて、みずからは入滅されたということが伝えられている。そしてさらにこの如来の前に光遠如来という仏陀があり、またその前に月光如来という仏陀があり、またその前に栴檀香如来せんたんかうという仏陀があり、さらにその前に善山王如来ぜんざんおうという仏陀が出て、このように順次に五十三人の仏陀が現われて衆生を済度したことがあるという。それらすべて遠い過去の姿となっていました。ところがこの錠光如来の出現したころ、また一人の

仏陀がこの世に現われた。この仏陀を世自在王如来という。この如来は特に人々から尊崇され、その呼び名も如来、応供、等正覚、明行足、善逝、世間解、無上士、調御丈夫、天人師、仏および世尊といろいろに呼ばれたのである。

この世自在王如来の時代に、ある国に一国王があった。彼は世自在王如来の説法をきき、心に大きな喜びを感じ、遂に仏のさとりを求める心をおこしたのである。そしてこの国王は王位を潔きよく捨てて、出家して一沙門となつてしまった。その名を法蔵と呼ぶ。この法蔵比丘は世自在王如来のところに行つて、この如来を心から礼拝したのである。世自在王如来は、法蔵比丘が高潔、賢明であつて、その志の極めて深いことを知り、この比丘の

ために経を説いてやった。そして至心に精進して道を求めてやまなければ、その願いも必ず成し遂げることができらうとさとし、かつこの比丘のために広く、数多い諸仏の国土について、その善なるもの、およびその惡なるものを選びとることを教えたのである。

そこで法蔵比丘は五劫の年月（劫は極めて長年月）を経て、仏国を飾るべき清浄の行を会得し、遂に衆生救済のため、極樂国土を建設することができたのである。

そこで法蔵菩薩（法蔵比丘）は世の人々を救うため大願をたてた。すなわちこのかけた大願は、すべて衆生のための念仏往生の願とされる四十八の誓願なのである。そのうちの経文にいう、

「誓願第十八条」——たとい、われ仏となるをえんとき、十方の衆生至心に信樂して、わが国に生れんと欲して乃至十念せん。もし生れずんば、正覺を取らじ。ただ五逆（の罪を犯すもの）と正法を誹謗するものを除かん。

という願は四十八の誓願の中心となる願であるといわれている。

また經典の中の「重誓偈」の一文には次のようにある。

われ超世の願を建て、必ず無上道に至らん。
この願満足せずんば誓って正覺を成ぜじ。

これにこそ法蔵菩薩の固い決心のほどがう

かがえる。そして法蔵菩薩は十劫というながい年月の修行を経て、四十八の誓願の成就を果し、遂に仏陀、阿彌陀如来となったのである。

これはどういうことかという、この世の人々は阿彌陀如来を念じ、阿彌陀如来の誓願を信ずれば、その人々は阿彌陀如来の力によって、死後において、極樂という安樂な国土に往生することができ、道が開けたということである。

それならば、人々の往生を願う極樂とは一体いかなるところであろうか。經典の説くところによってこの国土を一応覗いてみようと思う。極樂浄土は私共の住むこの土地から西

の方、十万億の仏国土を超えたところにある
楽土である。そこには現在、阿弥陀如来がお
られて、衆生に説法をしているという。この
国土を何故に極楽というかという、この国
土に生きる人々は何等の苦しみもなく、その
上いろいろな楽があり、人々はそこで静かに
修行をつづけることができるし、また遂には
仏陀にもなりうるからである。

さて、極楽国土に眼をうつすと、そこは例
えば七重の石垣、七重のターラ樹の並木など
鈴をつけた網によって飾られ、金、銀、青玉、
水晶の四種の宝石をあまねく巡らし、燦然と
した美しさを表わしている。また、金、銀、
青玉、水晶、赤真珠、碼瑙と第七の宝石であ
る琥珀との七種の宝石からできている蓮池が
あつて、八つの特性のある水が満ち溢れてい

る。蓮池の中には大輪の蓮華の花が咲き、青
い蓮花は青い色、青い輝き、青い影をおび、
黄色の蓮花は黄いろい色、黄いろい輝き、黄
いろい影をおび、紅の蓮花は紅の色、紅の輝
き、紅の影をおび、白色の蓮花は白い色、白
い輝き、白い影をおび、さまざまな色の蓮花
はさまざまな色、さまざまな輝き、さまざま
な影をおびている。さらにこの国土には、白
鴿、孔雀、鸚鵡、百舌鳥、迦陵頻伽^{かりようひんが}、供命の
鳥などが飛びかっているし、また、微風が静
かに吹いていて、いろいろの枝葉の上に流れ、
微妙の音を出さしめている。例えば、百千種
の楽を同時に出すようにひびく。この音をき
くものは、みな自然に念仏、念法、念僧の心
を生ずるのである。

極楽の主、阿弥陀如来の光明は無量であつ

て、十方の国を照している。したがってこの
仏陀を無量光仏とも呼び、またこの仏陀の寿
命はそのもとに集る人々とともに、無量無辺
であるがゆえに、この仏陀を無量寿仏ともい
っている。ところで私共は一体いかなる方法
によって極楽国土に往生することができの
であろうか。それは簡単である。すなわち阿
弥陀如来を念じ、その名号を一心にとなえれ
ば、その人は死に臨み、阿弥陀如来の来迎を
受け、極楽に往生することができるとい
うのである。このように、この仏陀は私共に対し
て、人間はいかに死ぬべきかを懇切丁寧に教
えてくれるのである。

この教え、およびその道程については、古
来大乘の名僧たちで、これを信じ、これを支
持するものが極めて多い。その中でもインド

の馬鳴、龍樹、世親（天親）、中国の慮山の慧
遠、そして曇鸞、道綽、善導、わが国の空也、
源信、特に専修念仏を発見した法然および親
鸞などの名僧は有名である。

しかし、ここで私共在俗の人間には一つの
重大な疑問が起つてくることと思う。それは
「西方十万億土に美しい、安楽な阿弥陀如来
の仏国土が存在する」というが、いま果して
真に存在しているのであるかという質問を
起したとしたら、私共はいかなる答えを得る
であろうか。「極楽浄土はたしかに存在する」
か、あるいは「極楽浄土は何処にも存在しな
い」かの何れかに明瞭に答えられる人がいる
であろうか。何故ならば、極楽浄土というも

のは、私共の認識の中にはっきりとはいって
くる世界ではなく、私共の感覚でとらえるこ
とのできない世界であり、また私共の乏しい
知識では証明のできない世界であるからであ
る。それならば私共はこの質問に対して答え
ることはできないものとして、これを放って
おいていいものであろうか。このまま放って
おくことは、真の宗教心、信仰心を無視する
に全く等しいものと私は考える。

そこで、私はこの問題についての答えとし
て、次のように答えたならばどうであらうか
と思っている。

すなわち、極楽浄土の存在するか否かにつ
いてはまず「人間の心の窓」を通じて見分け
るのである。そして極楽浄土に往生したい人
はその存在を心から信ずるのである。心から

固く信じたならば極楽浄土はこの宇宙に必ず
存在することはたしかであり、その人の死後、
その人に安楽世界を与えてくれることは疑う
余地がない。しかしもし、極楽浄土は存在し
ないと考えるものがあるならば、このものた
ちの前には極楽浄土は決してその姿をあらわ
してはくれないだろう。要するに、人間にと
つて極楽浄土の存否の問題は、その人間の心
の持ち方如何によって解決することができ
るものと考えるのは、これはあやまりであらう
か。ともかく、日々の念仏を怠たらず日々の
生活に精進したい。

○「浄土」表紙版画絵販売についてのご案内

『浄土』六月号をここにお届けいたします。

どうか、『浄土』誌の充実と継続のために、会員諸兄の皆さまの暖かいご支援とご高配を心よりお願い申し上げます。

好評の『浄土』誌表紙版画絵は、格調高い小林治郎先生の作品を頂戴しております。小林先生のご厚意を得て、豪華額縁に装丁して販売させていただいております。また木製の高級額縁代も含めて、金二五〇〇円というお求めやすいお値段で、季節感に溢れた芸術味豊かな版画掛物が購入できるわけです。どうぞ振替にてご注文願えば幸いです。

また、大きな方は、『浄土』表紙絵よりはずっと大きく、約20cm×30cm位の大きさですが、額縁の大きさでいえば30cm×50cm程の大変豪華な一幅となります。

なお限定販売のため、予定数に達しましたら、申し訳ありませんが、おことわりさせていただきます。しかし現在のところ、昨年度の版画絵も、正月号から十二月号までの在庫も充分にありますので、ふるってご注文願えば幸いです。

(申し込み先) 〒102 東京都千代田区飯田橋一―二―六

法然上人鑽仰会 振替(東京) 八―八二二八七

季語やぶにらみ(二)

春女苑・紫陽花

画才のある人がつくづく羨ましい。私自身絵心は持ち合わせているつもりで、時々スケッチなどを試みたりする。下手は下手なりに線描の間はまあなんとか見られるが、ちよつと陰影をつけたら、図に乗って色でも点そ

木の
下隆
——

(随筆家)

ものなら、忽ち動物も草花も似て非なるものになってしまふ。

福永武彦画文集「玩草亭百花譜」の「草花を描く」という小文の中に、

私の敬愛する詩人木下杢太郎に「百花譜」

といふ傑作があつて、木下奎太郎すなはち医学博士太田正雄は、昭和十八年の春から日課として草花の写生を試み、昭和二十年の夏に至つた。没したのは同年十月である。戦時下に描きためられた「百花譜」は、その数八百七十枚に及んでゐて壯観の極みである。この春岩波書店から刊行される予定だが、私はその校正刷を見て意気とみに沮喪したことを告白する。趣味もこれ程の域に達すれば、本業に劣ることがないといふ氣がして脱帽敬礼するのである。昭和五十四年三月。

という一章がある。

私がつめ息をついて眺め入る「玩草亭百花譜」の作者福永武彦をして脱帽せしめた木下奎太郎は伊東の人で、死の直前まで市内の生家で療養しており、ここでも多くの草花を写

生している。現在、生家は木下奎太郎記念館として市が管理しているが、「百花譜」の原画も何点か展示されている。先日たまたまこれに接する機会を得たが、確かに素人の域を脱した筆致で、医学者の冷徹な目を通して詩人の心を以て描かれたような絵であつた。結局は才能の有無が分かれ道か、いくら心があつても技が伴わなければ絵は描けないのだ、とその時私は悟つた。

さりげなく活けてありけり春女苑 隆一

国道百三十五号の、伊東市の海岸沿いを走るバイパスの途中に、「石舟庵」という和菓子店がある。小綺麗な店で、とりわけいつも季節の花が活けてあるのが嬉しい。この間は小ぶりの備前焼の花瓶に、若葉をつけた三

つ葉あけびの小枝と、小さい白い花が三つ四つ活けられていた。白い花は春女苑だった。

ハルジョオンⅡ北米原産のキク科の二年草。

「フィラデルフィアひなぎく」。和名の「春女苑」は中国の野草「女苑」に由来した名か。

大正年間に園芸植物として輸入されたのが逃げ出して全国に散らばった。輸入された時はピンクの花だったらしいが、今では殆どが白っぽい野生の花に戻っている。時に、一部ピンクを帯びた花を見かけるが稀である。花期は仲春から初夏。背丈は30〜60センチ。蕾の時はうなだれていて、見た感じはしょぼくれているが、咲く時にひょいと頭を抬げる。繁殖力旺盛で駆除の厄介な害草。

と、各種文献を要約すると、春女苑の大体の姿が浮かび上がってくるかと思うが、なん

のことはない、路傍で容易に見つけられる野草なのである。

しかし、この春女苑、まだどの歳時記にも載っていない。つまり季語として認知されていないのである。帰化したほぼ七十年。都会でも、かなり高い山でも見られる花なのに、なぜだろう。高浜虚子のような大家に作例でもあれば、案外すんなり市民権を得られたであろうに、思えば不幸な花ではある。

「石舟庵」の花は、活け花の専門家が活けたものではなく、内儀さんの丹精であるのも嬉しい。素材に高価な園芸物を使うわけではなく、裏山や庭にあるものを使って効果を上げているのだから、何流だか知らないが、この内儀さん、相当な技量の持ち主に違いない。でなければ、害草と毛嫌いされている春女苑

を、ああもさりげなく活けられるはずがないのである。

春女苑の種子が風に乗って四散するころ、走り梅雨がやって来て、やがて伊豆も本格的な梅雨の季節を迎える。

またの名をあぢさゐ寺と言い侍る 隆一

あじさいは六月の花、梅雨が最もよく似合花である。些細なことのようだが、「あぢさゐ」「あじさい」と書き分けたのにはわけがある。短歌も俳句も元来文語体の、文法的に言えば一つの「文」であるから現代仮名（新仮名）遣いは用いず、あくまでも歴史的仮名（旧仮名）遣いで書かなければならない、というのが私の持論だからである。と言っても、口語体の歌や句を作る場合はさにあらずで、

その際は努めて新仮名遣いで書くよう心がけている。平文の場合もしかりである。

さて、拙句の「あぢさゐ寺」であるが、鎌倉の明月院や大和郡山の矢田寺のようなあじさいで有名な寺ではなく、伊豆山中の古刹を訪ねた時のものである。村人に寺の名を告げて場所を尋ねたのであるから、全く無名というわけではないのだが、こともなげに「ああ、あじさい寺ですか」と返された印象が強烈で、寺名を失念してしまったのである。事実、その寺の境内の大きく盛り上がったあじさいは、どの花も清らかで見事だった。以来、我が家では誰も寺の名前を覚えておらず、中伊豆のあじさい寺で通っている。この季節、伊豆はどこもかしこもあじさいだらけで、山襲の奥にはそんな名で呼ばれているお寺がいくつも

ありそうな気がする。

アジサイⅡユキノシタ科の落葉低木。樹高は一〜二メートルくらい。ガクアジサイを母種とする園芸品で野生はない。大きな手まり状の花序をつけ、朝方の最低気温が十七度以上になると、多数の花を密集して開く。四、五枚の美しい紫碧色の花弁のように見えるのは、実は萼片^{がく}で、本当の花弁はそこにあることはあるが、疣々のように小さいので目につきにくい。萼片は淡青色だが、土質や開花後の日数等によって青が濃くなったり、赤が濃くなったりする。茎は材が堅く、木釘や楊子をつくり、花は解熱に、葉は瘡^{かさ}に特効があるという。あじさいの別名を「七変化」というが、花の色が次々に変化するところから、気の変わり易い人、冷淡な人と言う女学生間

の隠語、と記している辞書もある。いつの時代の女学生であろうか、こんな風流な隠語を使っていたのは……。

ガクアジサイⅡ関東・伊豆半島・伊豆諸島などの海岸地帯に野生するユキノシタ科の落葉低木。夏、枝先に大きな散房花序をつけ、周囲には少数の大きな装飾花をつけ、中央には多数の両性花（一つの花の中に雄しべと雌しべを有するもの）を開く。装飾花はアジサイに似て、萼片は四、五個。大形で花弁状となり、普通は青紫または白みがあった紫色。時には白花もある。

アジサイに関して数冊の本をつき合わせると以上のようになるが、どの本も花色の表現には苦勞している。「花序」という聞きなれない言葉は早速永六輔流に「広辞苑」を繙く。

花序Ⅱ花が茎または枝につく並び方。或いは花をつけた茎や枝。無限花序と有限花序に大別される。

無限花序Ⅱ下の方またはまわりから咲きはじめて、順々に上の方または中の方に及ぶもの。穂状花序・総状花序・頭状花序・散形花序などの総称。

有限花序Ⅱ花茎の頂端にある花がまず開き、次第に下方の花が開いてゆく花序。軸の先端に花がつくため生長が限定される。アジサイやニワトコがそれ。

どの本を見ても、野生のあじさいというものはなく、がくあじさいを改良した園芸種と出ているが、果たしてそうだろうか。我が国の文献に初めてあじさいが登場するのは万葉集巻第二十（四四四八）で、

安治佐為能 夜敵佐久其等久 夜都与介乎
伊麻世和我勢故 美々思怒波牟（あぢさいの八重咲くごとく八つ代にを いませ我が背子見つつ偲はむ）——あじさいが次々と色どりを變えてま新しく咲くように、万代の後までもお元気でいらつしゃい、あなた。あじさいを見るたび、あなたをお偲びしましょう（新潮日本古典集成万葉集五より）。

という、時の左大臣橘諸兄が、丹比国人真人の邸に招かれた時、「味狭藍の花」に寄せて、主人を寿いで詠んだ一首がそれである。位人臣を極めて諸兄が死去したのは西暦七五七年（天平宝字一年）だから、七五〇年ころ、がくあじさいの自生地を遠く離れた平城京に、既に日本人の手によって改良栽培されたあじさいがあったとは、俄かに信じ難いのである。

時代は少し下がるが、唐の詩人白居易（七二一八四六）の詩の註に、

招賢寺有山花一樹、無人知名。色紫氣香芳麗可愛、頗類仙物。因以紫陽花名之。（招賢寺に山花一樹有り、人として名を知る無し。色は紫氣は香しく芳麗愛す可く、頗る仙物に類す。因りて紫陽花を以て之に名づく。）

というのがある。紫陽花とはなんというほめ言葉であろうか。太陽に、色の中では最高位の紫色を冠して、仙物に類すと讚美しているのである。一方、和名のあぢさゐも「味狭藍」（味はほめる言葉。狭は接頭語）と藍色の花をほめた言葉と解釈しても差し支えないかと思う。

この長安に咲き盛っていた紫陽花を、平城京にもたらしたのは遣唐使ではなかったかと

私は推測している。珍奇な花、高貴な花として、貴人の邸か寺の奥深い庭で密かに栽培されていたのでは……そんな気がしてならないのである。矢田寺の紫陽花はその名残では……、つい、そんなことまで考えてしまう。

伊豆半島では、下田の城山公園の全山を彩る四万株とも五万株ともいわれる紫陽花が有名である。梅雨寒の日、雨に濡れて咲く紫陽花の風情は捨て難い。

三、四日紫陽花冷えが続きをり 隆一

「紫陽花冷え」は「梅雨寒」「梅雨冷え」の類語。一見季語のようだが、私の造語であるから、まず日の目を見ることはあるまいが、気永に作り続けてみたいと思っている。

（この項終わり）

◇ ◇ ◇ 好評新刊 ◇ ◇ ◇

安居香山 著

緯書と中国の神秘思想

漢代思想と緯書、道教と緯書、
緯書の成立とその種類、
神秘思想と科学などを易しく説く。

◇ ◇ A5判・三〇〇頁・定価二〇〇〇円 ◇ ◇

《発行・発売》

平 河 出 版 社

〒一〇二 東京都千代田区隼町三一―二

TEL(〇三)二六三一四八八五 振替(東京)一一一七三三四

緯書は迷信でもなければ、異端の書でもない。

れっきとした儒教の思想の流れである。

それは、漢代の時代思想を代表し、それ以後の中国思想にも深く根をおろしているのである。

◇ ◇ 長 篇 連 載 ◇ ◇

伝^{でん}
弘^ぐ
の
生
涯
(十八)

— 大僧正岩井智海伝 —

松^{まつ}
浦^{うら}
行^{ぎょう}
真^{しん}

続・管長として

「岩井智海伝」の取材に、奥野嘉久師を滋賀県蒲生町の自坊に訪れたとき、奥野から数

枚の写真を見せられた。

奥野は、六人きょうだいの中の五男で、へたをすると中学へ行けるかどうかもう危うかったとき、知恩院の常侍局で内役^{ないやく}をしていた父

から、「管長さんのお付にならないか。なったら中学へやって貰えるぞ」と言われて、一も二もなく高等小学校を中途退学し、十三歳で岩井の常侍となった人である。中学とはむしろ旧制で、余談ながら奥野は、岩井のポケットマネーで東山中学に通うことができるようになった。

その奥野が見せてくれた一枚は、三上人御遠忌のときに婦人雑誌の「主婦の友」が、岩井を取材にきたときに撮ったものである。ちょうど昼時ひるどきだったらしく、知恩院の管長室で、まだ少年の奥野から、お昼弁当の角切すみきりを受け取ろうとしているところが写っている。

これを見て筆者が驚いたのは、病み上りであることはもちろん、七十四歳という年齢すら、少しも感じられないことであつた。表情も姿勢も、しゃんとしているのだ。

そのことを奥野に告げると、奥野は、

「あの時は記者が、ああしてくれこうしてくれと、注文が大変でした。けれどもいやな顔一つせず、言われたとおり気軽にいろんな格好（ポーズのこと）に応じておられた。それというのも、身体の調子がよかったからだと思っています」

と語った。奥野は、岩井の発病は疲労からだったと、今はいっそう強くそう思うようになっていた一人である。というのも、いわゆる巡錫めぐしやくにしても、知恩院の事務局からは必ず執事級の人物（役員相当）が最低一人は随従するが、これはすべて交替でついて行く。しかし管長に交替はない。しかもスケジュールはすでに述べたように、はなはだ過密なものだったからである。

それだけに奥野は、三上人御遠忌中も、ほとんど周囲に病み上りであることを感じさせなかった岩井の回復ぶりを、有難く思う気持

になっていた。

遠忌がすむと、岩井は自坊に帰り、そこですこすことが多くなった。五重の勸誡などはいっさい謝辞して、休養につとめていたからである。

そのころのことであろう。福岡から松村澄江が旭蓮社へ相談にきたことがあった。

松村澄江は、洋画家・児島善三郎と岩井の交渉を述べたとき、登場をねがった婦人である。澄江の夫君・松村半次郎が、児島の従兄弟にあたるといふひとである。

彼女の母・野村種は熱心な岩井の信者で、当時は孫二人とともに京都の下鴨に居な構えていた。岩井が発病してからは旭蓮社に滞在することも多くなったが、もっぱら師に仕えるようにして岩井の療養につくしたひとである。澄江が堺にきたのは、一つにはこの母に会うこともあつてであるが、このとき彼女は

阿弥陀経をめぐつて、岩井とやりとりをしたことがあった。それをもふくめて、もう一度、澄江夫人の登場を願うことにしよう。

『母が京都へ出たのは、私の兄の離縁問題がからんでおりまして——というのが、^{おこよ}嫂にまずいことがありますして離縁をしたのですが、親戚どうしで家も近かったものですから、こどもとのがすっきりしないんですね。困りまして私の祖父——つまり母の父が大僧正に相談申しあげたところ、「しばらくこどもを離すしかないのではないか」となりまして、おばあちゃんが母親がわりになって孫をつれて京都へ参りまして、京都の幼稚園に入れたわけです。

それで、もうそろそろ福岡に戻ってもいいのではないかと話し合っているとき

に、御前さまがご発病になった。いままでお世話になっていて、ご病気になるれた時に帰るといふのも何でございませうし、親戚の者も、できる看病はとことんしてさしあげるのが順当だろうといふことで、お世話を申しあげました。当時は山田（智旭）さんの養母さまの花さんも旭蓮社にいらっしゃったから、それで母もご一緒できたのだと思います。

そんなことで私も、私個人の問題のご相談もかねて、お見舞いに堺へまいったようなわけですが、そのときに——まだ若かったものですから、生意気なことを申しあげてしまいました。

というのが、僧侶の方は皆さん、お経を棒読みなさいませう。あんなにお経、聞いていても有難くも何ともないというようなことをね。阿弥陀經なんか

も、ただ唱えられるのを聞いていても、意味がわかりませんから何にもならないって内輪で言っていたものですから。

するとそのときは「ふんふん」と言っていておられたのですが、しばらくすると「これを読みなさい」と言って阿弥陀經をわかりやすく解釈したご本を下さったんです。それで読んでみますと、お浄土の美しさが描いてあるんですね。ああ、なんときれいな状態のところなんだろうと思ったりして、それから今までと氣持がぜんぜん違ってきました。棒読みのお経を聞いているときは、ただ眠いばかりでしたけど……。いただいたその帙に入ったご本は、今も大切に持っております。

この時ばかりではなく、私はいろいろと御前さまに相談を申しあげております

ね。昔は今と違って、大家族主義でございましたので、やっぱり悩みごとも多うございましたから。それでお手紙を差し上げたり、お目にかかって申しあげたり……。そのたびに、気持の広くなるようないいお話を聞かせていただきました。

そうですね。いますぐ思い出せるのは、

しやうとめ 姑がね、他の宗教を信じていて、それを信じるようにと私に無理じいなさるわけですよ。それで若いときにご相談したことがありました。「そう信じている人には、逆らいなさんな」というのがお答えでした。逆らわずに、適当につきあっておきなさいと。つまり「あなた自身は仏を信じていて、他の宗教を認めないという気持はわかるけど、ここは家庭円満を第一主義に考えて、逆らうのはやめなさい。自分の気持に、自分の信心というも

のをきっかりと持っておれば、それでよろしいじゃないか」——。いま仏壇の前に「円満」という御前さまの字を掛けてございますけれども、あれはそのときのもんです。いただいたお手紙も、なかなかいい文面でしたけれども、これはどこかにしまい忘れてしまつて……。

そういうふうに、何度も何度も頼たのまれたということは、その都度、いい示唆がいただけたからだと思います。児島さん一家も皆さん、帰依しておられました。それというのも、やはり、そういうことがあつたからだと思います。

それからもう一つ——。

やはりこの時のことだつたと思うのですが、気晴らしにいいところへ連れて行こうと言われて、大阪へ出て行ったことがあります。お芝居を見て、その帰り、

「お腹がすいたな」とおっしゃって、ふつと見たら御前さまがおられないんですよ。勝手はわからないし、そのへんをキヨロキヨロ見回していたら、チヨロツと出てきて、「ああ、おいしかった。うどんな食べてきた」って。そうして「あんたはああいう店に入るのは格好悪がって、とても入りきるまい……」——有名でもなんでもない、ごくありふれたうどん屋さんでしたけれど、そんなふうに言われた——ちょっとそういう、自然児みたいなところがありませんね。そういう意味でこのときのこと、いまだに覚えております」(松村澄江談話)

岩井にとって平穏な、静養の日々がつづいたが、しかしそれもあまり長くはなかった。この年七月七日、中国北京西郊の蘆溝橋付近

で、暗夜に発砲された犯人不明の銃撃に端を発した支那事変を契機に、身辺とみに多忙となってゆくからである。

『道しるべ』掲載の年譜によると、八月から九月にかけて、伊勢神宮や明治神宮、靖国神社への戦勝祈願、皇居や陸軍参謀総長、海軍軍令部総長の両宮家への御見舞い、近衛文麿首相をはじめ外務、陸海軍、文部各大臣への挨拶、さらに東京、大阪、京都での時局にかんする講演会や戦死戦没者への回顧大法要などが、ぎっしりと詰まっている。これは一つには「管長」という職位が、当時は法律で定められた文部大臣管掌の官職であったからでもあるが、しかしどれをとっても、精神の緊張を伴わないものではなく、これが血圧に影響しないわけがなかった。しかも現在のように、血圧降下剤のような効果てきめんの便利な薬もなかった時代である。

十一月二十四日、岩井は知恩院での加行僧伝法を終わった直後、脳卒中を再発させた。

奥野のいう、「疲労による再発」である。重度なものではなかったが、前回よりは難症であった。それは言葉の点において、特にそうであった。呂律のまわらなさが、前回よりもひどかったのである。これは口演をもって法の伝弘を天職とする者にとっては、致命的なことであった。

二十六日、大僧正は堺の自坊に向かうべく、自動車で知恩院をあとにした。車が男坂にさしかかる直前、岩井は視線を御影堂にはしらせた。御影堂はいつもと同じ姿で、背景の東山に甍をそびえさせていた。彼がここに晋董して、すでに三年あまりがすぎていた。車は男坂を、ゆっくりと下って行った。もう、御影堂の甍も、視野から去った。以後、彼は知恩院の七堂伽藍を、ふたたび見ることはなかつた。

つた。

途中、岩井は車を、大阪の下寺町にある光明寺に停めさせた。光明寺は、彼が岩井龍海を養嗣子としたことで縁戚となった滝川秀音の寺である。滝川は岩井が知恩院門跡となると同時に常侍局長となり、岩井を補佐していたが、この年（昭和十二年）二月二十日、病を得て遷化し、常侍局長は三枝樹貫道に替わっていた。

岩井は言葉を発することはなかったが、しばしの間、滝川の位牌に合掌していた。おそらく心中で、懇ろな回向をしたことであろう。そのあと、彼はどんな感慨にふけたことだろうか。

岩井が初度の脳溢血を発病したとき、滝川はまだ健在だったが、彼は岩井に、

「私の目の黒いあいだは、なんとしてでもあなたを支えます。しかしわが身に万一のこと

があつたときは、左右をお決しなさいよ」

と、あたかも言い聞かせるがごとくに、語つていたのだ。^(註)その彼も、しかし今はもうない。

岩井は心中に、いよいよ「左右を決する」時期が到来したのだと、そのことに思いをめぐらしていたのだろうか。

十二月十二日、彼は、浄土宗管長ならびに知恩院門跡が辞退するむねを、表明した。ふたたび病を發して十八日目のことであつた。彼は一宗にたいする諭示のなかで、

『……去日^{かふ}重病を發し、四大輕安を欠く。然るに方今、時非常にして、重責一日を曠^{ひたし}うすべからず、即ち職を辞し……』

と、つづつていた。

終焉^{しゆうえん}

長崎・大音寺に晋山した前後かと思われるが、岩井は旭蓮社大阿弥陀經寺の住職を、龍海に譲つていた。大阿弥陀經寺は当時、境内の広さ七千平方メートル余もあり、そこに三三七平方メートルの本堂、二四四平方メートルの庫裡をはじめ、長堂、客殿廊下、善光寺堂、納骨堂、毘沙門堂、鐘樓、宝藏などが建ち並ぶ大寺^(註)であつたが、しかし病める老僧が療養するのに適当な座敷はなかった。そこでこの物語の冒頭にもでてくる。親戚の棟梁・小川万吉が福岡から呼ばれ、本堂の裏堂改築工事がいそがれた。そしてそこが彼の、終の棲み屋となるのである。

山田智旭によると、発病後一年くらいたってから、親しい人——たとえば「管長の満州・朝鮮巡錫」を企画した知恩院の執事・細井照道などが見舞いにきたりすると、ようやく話をするようになったという。それまでは見舞

い客がきても、あまり会話をしなかった。それは一つには、呂律のまわらないことを自分自身よく知っていて、会話そのものに億劫えいけつになつていたからだろうし、それが一年たつと、親しい人には聞きわけられる程度に、回復したということでもあろうか。

奥野嘉久も十三年に入ってから、日曜日かくると江州米を通学鞆たもとにいでて、よく堺へ持つて行ったが、岩井はまるで自分の息子がきたように喜んでくれたと、回想した。『岩井管長の常侍局』は、岩井の退任と同時に解散し、彼は滋賀県蒲生町にある自分の生まれした寺から、東山中学へ列車通学をするようになっていた。

しかし岩井は、年とともに気みじかとなり、ちよつとしたことにでも癪癪えんえんを立てるようになっていった。

けれどもそれは、彼の人の柄とは、無関係な

現象であつた。

死の前年、野村種が代筆して、岩井の郷里にお手伝いの輪旋ろせんを依頼した手紙が残っているが、それにも、『……女中はとても誰でもでは持つまいと思ひます』とまず記し、『……病人の事で時々はきき苦しいほどむりを云はれる時はありますが、』と続け、そしてさらに『……只御病氣の性質が日に増してイライラされる性しやうだと思ひますから、ほぼ其辺の事も承知して来て頂かん事には、始めての人ではびっくりしてにげだすかも分かりません……』と書いているように、高血圧による脳溢血を患う人に特有の、これは病理なのであつた。

察するに、岩井の病状は日とともに進行していたのかもしれない。

昭和十七年五月十五日、山田智旭は招集令

状を受け、大阪の歩兵第三七連隊に入隊した。

こえて二十四日、彼は連隊本部に呼び出された。本部には、陸軍中尉の軍服を着た旧知の奥野宗肇（そうもさき）が待っていた。奥野は石見教区大田組の大満寺住職で、福岡市唐人町の成道寺住職となった岩井の弟弟子（おとうとでし）の縁戚であった。その縁をもって岩井は巡錫の折など、よく奥野に随従を指名していた。

山田は思いがけないところで旧知に対面したことに驚き、もしやと思ったが、奥野の口から出た言葉はまさにそのことであつた。

今朝未明、大僧正は喘息の発作に誘発された狭心症により、遷化されたというのであつた。

かねて報をうけ、枕頭にあつた奥野はこのことのあるのを期し、軍服をたずさえていたが、それを一着におよび連隊長に面会を求め、桑門にあって師弟は親子以上の関係にあるこ

とを説いて、

「私が責任をもってこの二等兵を帰隊させますから、ぜひ最後の別れをさせてやっていただきたい」

と、まだ正式な敬礼の練習もろくにしていない新兵の特別外出を懇願して、承諾を得たのだった。

山田は急いで中隊に帰り、第一装の兵服に着替え、奥野予備中尉のあとに従った。彼が入隊の挨拶をしたとき、師はまだ元気で、もつれる口跡ながら、励ましの言葉を貰つたのだった。それだけにこの急変は、まったく思ひもしないことであつた。はやる心をおさえて、山田は大阿弥陀経寺の山門をくぐった。

奥野嘉久も、急変を聞いて駆けつけた一人だったが、大僧正はすでに棺のなかで花につつまれていた。

細井照道はその棺側に侍していたが、彼は

悲しみのなかにも、いま、一抹の安堵を覚えていた。^(注4)大僧正が生前、よく、

「わしが死ぬるときは、うまく往きたい。多くの同信に臨絵正念を教えてきたんじやからなあ」

と語るのを、覚えていたからである。彼はくるなり、静かに大僧正の顔を覆っている白布をとって、対面をした。大僧正は、なんの屈託もなく、生き生きとして、軽い笑ひさへ含んだ相好で、やすらかに眠っていた。

(ああ、やっぱり豪い方だったんだ)

と、彼は合掌瞑目したとたん、熱いものがこみあげてきて、どうすることもできなかった。それがたったさっきのことだった。

大僧正が眠る居間からは、まじかに池がのぞまれ、その岸べには杜若が、五月の陽光のなかに咲きみだれていた。それは前日まで、大僧正の目を慰めた花々であった。

このようにして、

「人はこの世に生まれて来たからには、世のため人のため、働き抜くことだ」

と、口癖のように言っていた伝弘の人は、なすべきことをすべて尽くして、この世を去っていった。

——旭蓮社大僧正願誓上人無涯底阿鈴泉智海大和尚。

八十歳であった。

(完)

(注1) 三枝樹貫道(一八七四—一九五四)は愛

知県生まれ。伊藤貫太郎といったが、

十三歳で四日市の光運寺・三枝樹守道

について得度、のち師姓をついだ。東

上し深川靈岸寺・神谷大周に宗戒兩脈

をうけ、浄土宗本校を卒業。二十六歳

で仙台の第二敎校敎授、以後、大阪第

六敎校、京都の第五敎校敎授、宗敎大

学分校幹事、第六、七連合教学校長、上宮中学（現上宮学園）初代校長などを歴任、その間、和歌山の九品寺から尼崎・甘露寺の住職に。のち教職を辞してから宗会議員となり、宗政にも。昭和二十一年知恩院執事長となったが、在職二年で一元化運動に端を発して突如辞任。そのわずか一カ月後に浄土宗は割れ、本派浄土宗の創建をみた（昭和三十七年再び合同）。

（注2）この頃は滝川秀音師の縁戚・滝川巖城師（兵庫県丹波組・本来寺住職）の談話に拠った。

（注3）旭蓮社大阿弥陀経寺は昭和二十年七月十日の大空襲により、毘沙門堂のみを残して他の諸堂宇すべて灰燼に帰した。また境内も数次の都市計画により二八〇〇平方メートル余に削減された。その後、山田智旭師が住職となるにょおんで、本堂、庫裡、山門、客殿などが

再建されて今日にいたっている。

（注4）岩井智海大僧正の終焉は、「鈴泉遺芳」に寄せた細井照道師のあとがき「編輯を閉づる臨みて」に拠った。

訂正

前号『浄土』五十六巻五月号）記載の（注1）友松円諦師の項で、神田寺と安民寺の浄土宗復帰時期がの「平成二年」とあったのは、「昭和五十七年二月」の誤りでした。お詫びして訂正します。

十八回に及んだ連載も今号で完結終了しました。

愛読者の皆様に励まされた好評の連載でした。

法然上人讃仰会

◎読者の皆様へのお願い

弊会会員の年会費は三、〇〇〇円です。月刊誌『浄土』を細々と発行しながら、念仏信仰の増進にと努力しています。新しい読者を広くご紹介下さい。

また誌面においては、『浄土』誌と会員諸兄の皆様とのより一層の繋がりはかるために、従来よりたびたび企画されたことでもありますが、誌面の数ページをさいて、不定期ながら随時「読者のコーナー」を設けております。左記要領で、どうぞふるってご投稿下さい。誌面充実のために、くれぐれも宜しくご協力下さい。

- 一、内容 自由（生活の一コマや我感あるいは思うことなどをエッセイ風におま）とめ下さい。
- 一、枚数 四百字詰用紙六～十枚程度
- 一、締切 毎月末日

法然上人讃仰会

「浄土」購読規定

会費一カ年 金三、〇〇〇円

（送料不要）

浄土 五十六巻 六月号

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可

平成二年 五月二十五日 印刷

平成二年 六月 一日 発行

編集人 宮 林 昭彦
発行人 佐 藤 密 雄
印刷所 長谷川印刷所

東京都千代田区飯田橋一―十一―六

発行所 法然上人讃仰会

電話東京二六二局五九四四番
〒一〇三 振替東京八一八二一八七番

最新好評のトラクト

竹中 信 常 著

佛 心 凡 情

ポケット版二四六頁
イラスト入り

佛さまの心で現代の世相を思い、これを凡人のわれわれに分りやすく説いた
文集。法話の材料または施本として御利用下さい。

定価 五〇〇円 送料 二一〇円

《発行・発売》

大 道 社

〒102 東京都千代田区飯田橋一―一―六
電話(〇三)二六二―五九四四 振替(東京)二―八二四七

第五十六卷

六月号

昭和十年五月二十日 (第三種郵便物認可) 毎月一回一日発行
平成二年五月二十五日印刷 平成二年六月一日発行